

## 平和保つべし 国境の街で思う

松の内が明けて、キャンパスアジアの学生たち十数人と成田空港を見学を訪れた。キャンパスアジアとは、日本、中国、韓国の大学がトリオを組み、学生は自分の大学のほか、2か国のパートナー校を訪れて授業を受けるという国際プログラムである。

例えば東大公共政策大学院のキャンパスアジア生は北京大学とソウル大学にそれぞれ半年以上滞在する。一年以上滞在して、ダブルディグリー、つまりパートナー校の学位を併せて獲得することもできる。国が支援し、相手国を訪れている学生には奨学金を授けるといふ、将来の東北アジアを担うリーダーたちを育成するための素晴らしいプログラムだ。

ちょうど昨年は成田開港40周年。年配の方々は記憶に新しいだろうが、激しい空港建設反対運動が展開され、反対派、警察の双方に死者が出た。学生たちが侵入し破壊した管制塔に上る前に、我々一行が最初に訪れたのは「成田空港 空と大地の歴史館」。そのホームページによれば、「様々な立場の人々の苦悩と想いを正確に後世に伝えるため」、8年前に開館したという。公共政策学の事例研究にはうってつけの場所である。

2015年に開業した第3ターミナルは格安航空会社(LCC)専用。訪れた時はすでにお昼をやや過ぎていたが、フードコートは多くの旅行者でごった返していた。成田空港には、第3滑走路と第4ターミナルを建設する計画がある。外国人が来日する「国境」が広がるのは素晴らしい。だが、その基本条件が平和の維持であることを忘れてはならないだろう。

成田空港をキャンパスアジアの学生たちと見学した2日後、そこから研究者仲間とハバロフスクに飛んだ。2時間半で着く極東のヨーロッパ。ロシア革命や第1次世界大戦後のシベリア出兵の前、明治の頃から日本人が移り住み事業を起こしていた。ある資料によれば、ロシア革命前、人口5万のハバロフスクに600-850名の日本居留民がいたという。現在は人口が61万人で、長期滞在する在留邦人は50人程度だから、百年前の方が日本人は元気が良い。だが今の方が日本は近い。街には右ハンドルの日本の中古車が多く走っており、日本を訪れたことのある人も多いという印象だった。

ハバロフスクはアムール川とウスリー川の合流地点に位置する。夏季はアムール川上流の中国黒龍江省撫遠市との間を水中翼船が往復する。所要時間は70分ほどで距離にすれば約60キロの近さだというが、氷点下20度の極寒期だったせいも、街で中国人の姿はほとんど見かけなかった。

近郊にある三角州が大ウスリー島で、1991年に中ソ国境東部協定が締結された際に棚上げされた二ヶ所のうちのひとつだ。ソ連、そしてロシアが島全体を支配していたが、2004年に結ばれた東部国境補足協定により、島を半分ずつ「フィフティ・フィフティ」で分け合うことで解決した。

島の西半分を得た中国側では観光地としての開発が進み、撫遠市には立派な船着き場のほか貨物港や鉄道駅が出来ているようだ。それに対し、ロシア側では洪水対策の護岸工事も進んでいない。一般市民は経済交流の活性化を望んでいる。だが資金不足に加え、安全保障

上の懸念もあって、ロシア側では開発への消極的な姿勢が続いている。

検問所を通り、ウスリー川を少し南へ遡った位置にあるカザケヴィチェヴォ村を訪ねた。川岸まで行くと、よく整備された公園のある対岸の中国領まで数百メートルの近さ。川が凍っているのも、夜陰に乗じて向こう岸に渡るのは簡単だろう。さらに川を南下すれば、ウラジオストックまでの中間地点近くにダマンスキー島がある。1969年に中ソの国境紛争があったところだ。

小さな歴史資料館で、コサックが開拓して以来の村の歴史について話を聞いた。館長さんは1958年から村に住んでいるという小柄なおばあさんで、対岸の中国人とは仲良くしていただいけに、戦闘があった時はとても驚いたという。

ハバロフスクは、シベリア抑留者が多かった街でもある。歴史によく学び、国境の平和を保つべし。それが亥年年頭の所感である。